

関西支部勉強会レポート

第 25 回関西支部勉強会

僕らの社会はわがままだ～1億円ワークショップで知る社会の仕組み～

日時 2012年11月12日(月) 18:00-20:00

場所 京都大学 物質-細胞統合システム拠点 本館 2階セミナー室

ゲスト 奥本 素子 氏 (総合研究大学院大学 学融合推進センター 助教)

岩瀬 峰代 氏 (総合研究大学院大学 学融合推進センター 講師)

人数 19人

1. 関心を翻訳するとは？

ラトゥールは、研究者が社会を巻き込む重要性について論じている。他者を巻き込む方法として彼が提案しているのが、「関心の翻訳」。

* 「関心を翻訳する」とは？

科学者は社会に埋め込まれている存在であり、自分の主張を実現するには、それを補助してくれる他者の存在が必要になる。

自分の研究の関心と社会とのマッチングを叶えるために、他者の目指すものと自分の主張したい部分を、何らかの形で融和させていく戦略。

ラトゥールが示す翻訳の方法

- ・彼らの関心を移行させる
- ・彼らの関心の近道を案内する
- ・目的を置換する
- ・新しい目的を考案する
- ・新しい集団を作り出す
- ・迂回路をみえないように表現する

関西支部勉強会レポート

2. 関心の翻訳を体験してみよう！『1億円ワークショップ』

『1億円ワークショップ』は、大学院生に自ら学び考えてもらうために開発されたもの。

ニーズがそれぞれ異なる複数の関係者を説得するために、多様なニーズを組み込んだアイデアを生み出すことを目指す。

ワークショップの概要

- ・軸となるシナリオ

ある町に新たなミュージアムを建てる計画がある。建設には、理系研究者、文系研究者、行政関係者、市民の4者からの融資が必要になるが、4者はそれぞれ町や新設ミュージアムへの主張を持っている。

- ・すること、目指すこと

4人で1組のグループで作業を進める。

まずはステークホルダー4者のニーズを“調査”し、ミュージアムの構想を練る。各グループがつくったミュージアム構想に対し、4者がそれぞれ1000万～3000千万円の融資判定を行うので、各グループは、合計1億円の融資をめざし、4者の異なるニーズをどのように融和するかを考える。

ワークショップのながれ

①課題提示

「ある市にあるNPOの職員という立場で、新たなミュージアムの計画を立てる」

↓

②聞き取り調査

ステークホルダー4者（理系研究者、文系研究者、行政関係者、市民）に4人グループメンバーがそれぞれ1人ずつ、聞き取り調査を行う。

ミュージアムに対してどのようなニーズを持っているのか？

インタビュー形式で、彼らの考えを引き出す。

↓

③グループ内での話し合い

4者からの聞き取りをもとに、ミュージアムのコンセプトを練る。

「テーマ」「ミュージアムの特徴」「ミュージアムのアピールポイント」を考える。

関西支部勉強会レポート

↓

④発表、出資金の判定

各グループの発表。

その後、ステークホルダー4者（理系研究者、文系研究者、行政関係者、市民）それぞれの判定！

ちなみに、3グループともに融資の合計金額が9000万円という結果でした。残念。

↓

⑤まとめ

3. ワークショップのまとめ

関心の翻訳に必要な姿勢として、

- ・ニーズを単に受け入れるだけでなく、新しい目標をつくること
 - ・他人を説得する行為は、折衷ではない創造的な行為である
- という2つが提示された。

確かに今回生み出された3つのミュージアム構想は、4者それぞれのニーズを何とか折衷しようとしたり、あるニーズを切り捨てて1億円を狙ったりしていたものばかり。「関心の翻訳」を達成できたグループはなかった。

1億円に到達することのできなかった参加者からは、「なるほど…」という声も漏れていた。

4. ワークショップの振り返りと感想

自分の主張を通しつつ、誰かを説得する行為。

受け入れるだけでも、力づくで主張を通すのでもなく、他者と自分の目指すものをしっかりと見つめながら、そこに新たな視点や目的を創造していく。

ただ1つの到達点を定めることのないこのコミュニケーションの姿勢は、研究だけでなく、普段の生活においてもとても大切なものであるように思う。

また、ワークショップがひととおり終わった後は、参加者によるワークショップ自体の振り返りと議論が行われた。

関西支部勉強会レポート

ここで生まれた多様な意見と関心を包括することで、このワークショップ自体もさらに創造的に変革していくのではないかと感じた。

科学コミュニケーション研究会 関西支部有志

第25回 記録担当：渡川智子（京都大学）

第25回 運営担当：水町 衣里、秋谷直矩（京都大学）、加納圭（滋賀大学）